彩不定、故从熒省、會意、兼形聲、自淺人謂鶯即鸎字、改説文爲鳥也、而與下引詩不貫、於形聲會意亦不合、不可以不辨也、从鳥熒省聲、熒各本作榮、今正、説文熒省聲之字、其十有九、無榮省聲之字、烏莖切、十一部、詩曰、有鶯其羽、

〔和爾雅 禽鳥六〕鶯カラスウグヒス 黃鳥、黃鸝、倉庚、鸝鶹、商庚、鵹黃、黃鶯並同、亦或謂黃栗留、或謂之黃袍、和邦所謂宇久比須非此鳥、 報春鳥ウグヒス 渚山記云、山鳥如鴝鵒而色蒼、毎至正二月鳴曰春起、至三月止鳴曰春去、採茶之候也、呼爲報春鳥、

〔八雲御抄 鳥三下〕鶯 もゝちどり是は不限鶯、是春百千鳥之囀也、但鶯に詠有例、 はつ鶯

萬、山ぶきのかげみとびくると云り、後撰、雲ゐにわびてなくこゑといふ、源氏に、なきてわたるといへり、なきてうつろふとも、源氏に松にもすくうと云り、つくれる鶯の事なれど同事也、尋常には梅にすくうもの也、さくらにはやどらず、源氏に、すだちし松と云り、鶯のすはなべては竹也、萬十七、鶯のなきちらすはる花といへり、萬、やつかさになくと云り、やつかさは、山谷こえてといふ也、萬、玄ばなくと云、玄ば〱なく也 又つまをもとむと云り、又青竹の枝くひもちてさゝ。のうへに、おはうちふれてと云、又榎みをくうと云り ねぐらは梅竹也、櫻をわきてねぐらとせずとは、在源氏、

〔藏玉和謌集 春〕花見鳥。 鶯

春ははや比に成行山ざとの軒に來てなけけふ花見鳥

〔日本釋名 鳥中〕報春鳥ウグヒス うくはおく也、おとうと通ず、ひすはいづ也相通ず、おくいづ也、春は谷のおくよりいづるもの也、幽谷をいでゝ喬木にうつる也、鶯の字うぐひすと訓ずれどもしからず、鶯はうぐひすより大にして黃色也、もろこしに多し、日本にもわたるからうぐひすと云、其いろかたちはすぐれてよけれど、こえはうぐひすにおとれり、

〔東雅 禽鳥十七〕春鳥ウグヒス 倭名抄に陸詞切韻を引て、鶯は春鳥也、楊氏漢語抄に春鳥子ウグヒスといふと註せり、萬葉集に、春鳥よむでウグヒスといひしも、楊氏の説に據れるなるべし、ウグヒ